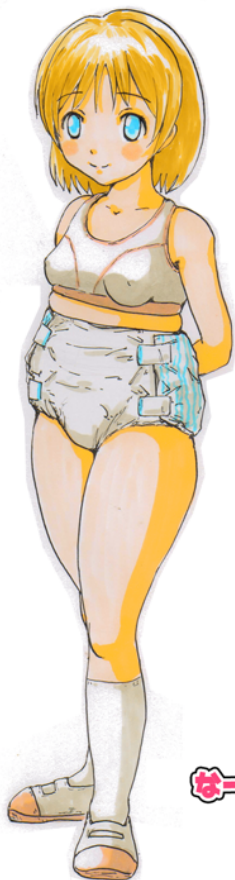


国立療育センターの一夜 かなつとつうたの物語



R-15

なーさりい・きりんせす

Saki Kirisima

ゆんびよう

中村あそ

国立療育センターの一夜

保護少年コウタと保護少女カナコ

これは、この国の少し未来の出来事。

かつての経済崩壊を発端に、子供達を取り巻く環境は最悪の一途を辿っていた。

子供を設けた物の様々な事情で育てる事を諦めざるを得なくなった親もいれば、満足行く教育を施す事が出来ず、子供の精神荒廃を招く事も多かった。

特に多かったのは親の子供に対する家庭内暴力、すなわち虐待行為、次いで育児放棄、いわゆるネグレクトだった。

他にも、こうして熾烈な環境で育った子供達でも

ある者は塞ぎこみ、愛着障害やPTSDに苦しむ一方学校内での虐めや校内暴力に走る者も居た。

暴力の楽園と化した学校は弱い子供達にとって最早忌み地でしかなかった。

荒廃した学校、子供達の心を踏みにじる親の急増は、たちまち子供達の精神疾患発症率として表れ、人々を恐怖させた。

この国の未来を担う子供達の半数以上が、荒みきった社会によって心に傷を負い、それが疾患と言う形で顕現しているのだ。

こうして、国は心に傷を負った子供達のケアを行う専門機関「国立療育センター」を国立市の一角に設立し、子供達のケアを始めたのだった……

トラウマや重度のストレスに晒された子供の保護と、回復を手助けする為に設立された国立療育センターでは専門の医師、看護師、コーチ、そして地元指定校からやってくるボランティアの少年少女達によって、保護された児童達のケアを支援していた。

ここに送られてくる子供達は皆、ある問題を抱えている。

虐めや虐待・育児放棄で発生した心理的外傷による喪失感や孤独感、愛着障害を初めとする精神疾患。

また、それらに伴う夜尿症や、幼児回帰願望を持つ子供もいた。

彼らを癒し、救済する為に用意された療育プログラムの一つが夏休みに提供されるサマーキャンプだ。

子供達はこれまで受けてきた体験、そして今の願望、性格、嗜好を元にマッチングされた部屋割で二人一組のバディを組み、互いを支え合う事で信頼を築き、傷を癒やす体験を得る。

サマーキャンプではこのバディが昼間はセンターの職員やボランティアの少年少女達の力を借りつつ、リハビリとして軽いストレッチ、マット運動を通してスキンシップを行い、心を互いに通わせることで治療を進めていくのだった。

ある日の夜、今日入所したばかりの保護児童、コウタとカナコの二人はリハビリを終え、職員に連れられ、センターの寝室に案内されてきた。

職員は二人に上下一体で中綿でもこもこになったオーバーオールのパジャマと二人分はある分厚い

抱きまくらを二人に手渡すと、それぞれの名前欄に患者番号と名前を書き入れるよう、太いマジックペンを差し出した。

この二つが何を意味するのか、まだコウタは知らなかったが職員からこれはプレゼントだと説明されると悪い気はせず、むしろ少し喜んだ。

子供達が部屋に入ると、入所マニュアルにある通り、部屋に用意されたシャワールームで身体を洗い、さらにお互いにベビーパウダーで身体を包み合う。相互のグルーミングもまた、互いの心を近づける為のケアメニューである。

そして、部屋に予め用意された分厚い紙オムツをお互い履かせあい、それよりも更に分厚いオーバーオールに着替えた。

白地のビニールにパステルブルーのラインで裝飾された紙オムツに、少年は最初困惑したが、この分厚いオムツは精神的な安定感を得る為の物だと説明されていた為、恥ずかしがりながらもそれを受け入れた。

カナコはぎこちない手つきでコウタにオムツを当て、テープをピツと伸ばし、貼り付けてあげた。

就寝前に、二人はオムツとパジャマという姿で部屋にマットを敷き軽いストレッチを行う。

二人一組で互いの身体を牽引するため、互いのオムツはしばしばこすれあう。

自然と思春期の少年と少女からは吐息が漏れ二人は激しく高揚していた。

ストレッチを終えた二人は、別々のベッドに名前入りの抱きまくらを抱えて入り、就寝する。

しかし、既にこの時点で本人達には知らされていないケアメニューが始まっていたのだった。

二人がベッドに入り、一時間ほどしてからである。

『ふっ……ふっ……ふうっ……はあ……はあ……はあ……はあ……ふっ……はあ……』

少年は必死に歯を食いしばりつつ、顔を赤らめて臀部を抱きまくらに擦りつけていた。

分厚く、やわらかい感触で臀部と局部を包み込む紙オムツの感触は、思春期の少年の敏感な性器を勃起させるには十分だった。

分厚く、温かく、やわらかい紙オムツの甘い感触を知ったコウタは、最初のうちは内股を動かし、局部へと更なる甘い感触を求めていたが、次第にそれ

だけでは我慢が出来なくなっていたのだ。

「(もつと……もつとこのオムツを感じたい……もつと強くオムツに僕のチンポをくつつきたい……何か、何かないかな……強くこすれるもの……食い込ませたい……)」

その激しい欲望を解決するための救いは、彼の手の中にあつた。

コウタは自分の名前が書かれた抱き枕にまたがり、切ない声をあげながら懸命に腰を振り、紙オムツに包まれた短く野太いチンポを擦り付け、オナニーに耽っていた……

こんな場所をルームメイトのカナコに知られたらどうなってしまうだろうか。
きつとただでは済まないだろう。

かつて、学校で経験した凄惨ないじめや、学校で居場所を失いひきこもりがちになった彼を怠け者と罵倒し、折檻する両親の姿が彼の脳意を掠めた。

そんな恐怖も、この分厚い紙オムツを突き破ろうとするほどの欲望には勝てない。

遠慮がちにゆっくりとさせていた前後運動も次第に激しく、容赦ないものとなる。

『ハツハツハツハツハツハツ……』

ゴシツゴシツゴシツゴシツ……

『ふうっふうっふうっふうっ……』

ゴシツゴシツゴシツゴシツ……

規則正しくオムツが抱きまくらを扱きあげ、中のペニスを押しつぶし、包み込み、擦り上げる。

コウタは次第に思考を放棄し、一心不乱に抱き枕の上で前後運動を繰り返す。

それから暫くして……少年は自分以外の声を不意に聞き取った。

この部屋には自分とルームメイトのカナコしかない。

けれども、既に彼女は寝ているはずだ。

一時は放棄されていた思考を取りもどし、部屋の奥にあるベッドに意識を向ける……

「ふうっ、ふうっ……」

ぐいっ……ぐいっ……ぐいっ……ぐいっ……

部屋の中央を挟んだ先では、ルームメイトのカナコもまた、カケルより一回り大きな身体を激しく抱き枕にこすりつけ、吐息を規則正しく発し

ていたのだった。

『あ、ああ……』

コウタは震えた。

ここで出会った初めての友人。

ルームメイトとして心を通わせたカナコが同じようにオムツオナニーに身を委ねている。



コウタは震えた。
ここで出会った初めて出来た友人。
ルームメイトとして心を通わせたカナコが
オムツオナニーに身を委ねている。

それは、自らの理性を投げ捨て、本能に身を任せるには十分な光景だった

『はああああ……』

コウタは辛うじて力を振り絞り、立ち上がった。

朦朧とする意識と、まだペニスに残る暖かく柔らかな紙オムツの感触の余韻を味わいながらもコウタは震える足を引きずり、懸命にカナコのベッドへとたどり着くと腰を下ろした。

『ね、ねえ……カナコちゃん……？』

い、一緒に……』

突然の声にカナコは驚愕した。

コウタの告白ではない。

見られてはいけないもの、見られてはいけない行為

をルームメイトに目撃された事に動揺していたのだ。

「ま、まってコウタ君!？」

驚きの声を上げる前に、コウタは大胆にもカナコのベッドに潜り込んでいた。

『カナコちゃん……カナコちゃんも僕と同じ様にアレ、してたんだよね？』

一緒に……しよ……』

顔を真っ赤にして、コウタはカナコに懇願した。
震える手で少年はカナコの手を握り締める。

しばらくの沈黙、一瞬ながらもそれはとても二人には長く感じられた。

「う、うん。いいよ……」

カナコが答えるより前に、カナコはコウタの
パジャマの上から、紙オムツを手でこすりあげた。

抱きまくらに押し付けるほどではないものの
素早く繰り返しこみ上げる快感から巻き起こる
激しい感情にコウタは押し流されていった。

ベッドの奥にはねられた掛け布団の手前では
カナコはコウタの股間に顔をうずめ慈しむように
頬ずりし、紙オムツを右手で懸命に擦り上げ、左手
は紙オムツの上から尻をなでまわしていた。

『ねえ、コウタくん……き、気持ち良い……？』

ふいに顔をあげてカナコは尋ねる。

「少し、弱いかも……」

さらなる圧迫感と快感を求め、コウタは答える。

『じゃあこうしよう……』

コウタくん！一緒にオムツ、こすってエっ！』

カナコはコウタの身体に覆いかぶさり、無我夢中
に強く抱きしめた。

二人の性器はカナコの体重と二人分のオムツで
押さえつけられながら、激しく擦れ合う。

『あつ、あつ、コウタのくんのオムツチンポっ！
熱くて固くてプニプニして擦れてる！』

カナコは更に激しく腰をゆさぶる。

そして更に膨張したコウタのオムツチンポもまた
カナコのオムツの下で膨れあがったクリペニスを
激しく擦り上げた。

『カナコちゃん！ 僕のオムツチンポ

気持ち良い？』

「コウタ君のオムツ！これ、凄くいいっ！いいっ！

もっとして！」

二人は更に激しく体をゆすさぶる。

「コウタくん！コウタくんももつとこすって！」

『う、うん。カナコちゃんも、もつとして！

っ！！』

闇の中で二つの影が激しく体を擦りつけ合う。

摩擦音が響く中、陰部を包み込むオムツが擦れ

互いが更に激しくおしつけあい、熱を帯びていく。

シュツ！シュツ！グニュツ！グニュツ！

「アヒツ！ヒツ！もつと、もつと、もつと！

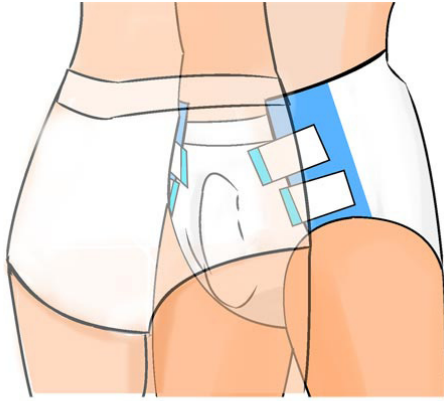
もつとおっ！」

ゴシツ！ゴシツ！シュツ！シュツ！

『あっ！あっ！あっ！あっ！ンホおっ、ンホオオオオオオ！！！！』

二人の紙オムツが擦れ合うたびに二人の股間からは紙オムツのビニール地の摩擦音が響き、オムツの中では互いの膨張した性器が紙オムツ越しにぶつかり合い、互いを押しつぶすかのように変形する。

勃起したコウタのチンポで盛り上がった紙オムツは更に勢いを増してカナコのオムツとぶつかり合い、擦れあい、その度にぐにやりと形をかえる。



二人の性器はカナコの体重と二人分のオムツで
押さえつけられながら、激しく擦れ合う。
『あっ、あっ、コウタのくんのオムツチンポっ！
熱くて固くてブニブニして擦れてる！』

二人の体は激しく波打ち、限界を迎えていた。
「あ、あああーっ！オムツチンポ！
オムツチンポ気持ちいいっ！
コウタクんのチンポ凄くいいよーっ！」
『カナコちゃん、もっとおおおっ！もっとな
もっとな！もっとなとしてえっ！』

二人は悶狂い、求めあい、貪る。

「ね、ねえ、コウタクん！いい、一緒にいこうね！」
カナコは自分の両手をコウタの両手に絡めながら
叫ぶ。

『うん！一緒に！一緒に行きたい！！』

コウタはカナコの手を強く握りかえす。

「こ、コウタ君、お、お願いっ！き、キスしてっ！

あ、アヘエエツ！！！！！！」

カナコは体をえびのように反らしながら足を強く
伸ばし、目を見開きながらコウタを求める。

『い、いいよっ、あ、アア……アヘエっ！』

コウタも両足をカナコの背中にまわし、強く挟み
込み、体を痙攣させながらも懸命にカナコの求めに
応じた。

ちゅっ、ちゅうっ……ぴちゃっ、ちゅうっ！

二人は激しく体を震わせながらキスを繰り返す。

唇と唇をかさね、互いの唇を吸い合い、差し出された舌を絡め合う。

「ああっ！出ちゃう！出ちゃう！

出ちゃうよおーっ！」

『ぼ、僕もいくーッ！いくっ！でる！』

どびゅっ！どくっ！びくっ！！

淫らな排出運動と筋肉の鼓動がオムツの中に響く。

二人は一つの影に溶け合い、体を重ね、キスをしたまま果てる。

これこそが国立医療センターが、子供たちに知らせることなく用意したケアだった。

パートナーへの激しい欲望を思春期の子供に抱き

枕と紙オムツを与えことで促し、二人の関係を心と体と快感を分かち合うパートナーシップへと進化させる。

こうして、傷を負った孤独な子供たちの心は補完されていくのであった。